

## 「山上の説教」の舞台設定に隠された神の秘密

### ベレーシート

#### (1) 「ヘブル・ミドゥラーシュ」の今後の取り組み

●「ヘブル・ミドゥラーシュ例会」は、2014年8月から始まって二年半になります。今回(2017.2)の例会で第11回目を迎えます。これまでの主の導きに感謝するとともに、聖書をヘブル的視点から解釈(注解)するという試みを、今回の例会においても、さらに明確に意識して推し進めていく場となればと願っています。私の発表に入る前に、励ましとなる一冊の本を紹介したいと思います。

「ヘブライ人キリスト福音書はいかにして成立したか」(クロード・トレスモンタン 著、道躰章弘訳、2013年、水声社)がそれです。著者のクロード・トレスモンタン(Claude Tresmontant, 1925~1997年)はフランス人で、パリ大学の哲学科教授であり、ヘブル語とギリシア語に通じています。彼は福音書のギリシア語によるテキストを読み説きながら、四つの福音書は間違いなく、先に書かれたヘブル語文書(手控え)の逐語訳であることを、実例を挙げながらそのことを結論づけています。ギリシア語で書かれた四福音書の書かれた時期についても、これまでの常識を根底から覆す画期的な論考をしています。彼は、「キリスト教の神学用語のすべてを理解するためには、常にヘブライの根に遡及しなければならぬ。」としています。この点はヘブル・ミドゥラーシュ例会の土台となっている考え方であり、この例会に参加する者たちの共通項です。聖書を通して、そのことを私たちは論証していく責任があると考えていますが、それ以上に重要なことは、ヘブル語が神の御子イエシュアを啓示する神が定められた唯一の聖なる言語であるということです。残念ながら、「ヘブライ人キリスト」の中では、この点については扱われていません。※ちなみに、トレスモンタンの著書で邦訳されたものとしては、「ヘブル思想の特質」(西村俊昭訳、創文社)、「パウロスーキリストの秘儀の解説者」(岳野慶作訳、中央出版社)などがあり、そこから有益な情報が得られると思います。



#### (2) トレスモンタンの論考の一例として

●ここでC.トレスモンタン氏が、マタイの福音書の原本(手控え)はヘブル語であったと論考している例を、マタイの福音書1章に限って、三つのことを紹介したいと思います。

##### ① 論理的な不自然さ 【マタイ1章21節】

τέξεται δὲ υἱὸν καὶ καλέσεις τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἰησοῦν,

産む 息子 呼びなさい 名前を その イエス

αὐτὸς γὰρ σώσει τὸν λαὸν αὐτοῦ ἀπὸ τῶν ἁμαρτιῶν αὐτῶν.

彼は なぜなら 救う 民を 彼の ~から 諸々の罪 彼らの

●この文章のどこに論理的な不自然さが見られるのかと言えば、御使いがヨセフにマリヤによって生まれる子どもの名前を「イエスース」(Ἰησοῦς)と呼ぶ(=名づける)ように言います。そしてその理由「ガル」(γάρ)として、「この方こそ、彼の民をもちもろの罪から救うからです」と説明している点です。もし、「イエシュア」(יֵשׁוּעַ、あるいはיֵשׁוּעָה?)となっているのであれば、その理由が「民を罪から救う」ということが論理的に成り立ちます。ギリシア語の「イエスース」にはそのような意味はありません。ヘブル語の「イエシュア」だからこそ、「救い」という意味が論理的に成り立ちます。それゆえギリシア語の理由を示す「ガル」が不自然なのです。これはイエシュアを「イエスース」に置き換えたために、その名前の意味を記す必要があったと言えます。

② ヘブル語の音訳としての「インマヌエル」(Ἐμμανουήλ) 【マタイ 1章 23 節後半】

καὶ καλέσουσιν τὸ ὄνομα αὐτοῦ Ἐμμανουήλ, ὃ ἐστὶν  
 そして 呼ぶようになる 名を その インマヌエル その名は ~である  
 μεθερμηνευόμενον Μεθ' ἡμῶν ὁ θεός.  
 訳すと「~」の意味 ともに 私たち 神が

●この箇所はヘブル語の「インマヌエル」(「インマヌー・エール」אֱלֹהִים עִמָּנוּ)をギリシア語に音訳してἘμμανουήλと表記したと考えられます。しかも、「メス・ヘーモン・ホ・セオス」(Μεθ' ἡμῶν ὁ θεός)のギリシア語の語順が「ともに・私たち・神が」となっているように、語彙の並び方がヘブル語と全く同じであり、ギリシア語がヘブル語の逐語訳となっていることが分かります。主語と動詞の配置、Be 動詞の有無など、本来、ヘブル語とギリシア語には大きな相違があるのです(創世記 1 章 1 節、詩篇 1 篇、マタイ 5 章 3 節参照)。

③ マタイ 1 章 25 節前半の「知る」はヘブル的慣用句の逐語訳

καὶ οὐκ ἐγίνωσκεν αὐτήν ἕως οὗ ἔτεκεν υἱόν :  
 カイ ウーク エギノースケン アウテーン ヘオース ウー エテケン ヒュイオン  
 そして ~ない 知る(γινώσκωの未完了) 彼女 ~まで (~する時) 産む(アオ) 息子を

●「~まで知ることがなかった」という表現の意味することは、「夫婦としての性的な交わりがなかった」ことを示すヘブル的表現です。そのヘブル語は「ヤーダ」(יָדָה)という動詞ですが、ギリシア語の「知る」を意味する「ギノースコー」(γινώσκω)にはそのような意味はありません。ヘブル語の「ヤーダ」(יָדָה)によって、子を身ごもり(妊娠して)、子が産まれます。旧約聖書で最初に動詞「ヤーダ」が使われる箇所は創世記 4 章 1 節です。

【新改訳改訂第3版】創世記 4 章 1 節

人は、その妻エバを知った(「ヤーダ」יָדָה)。彼女はみごもって(「ハーラー」הָרָה)カインを産み(「ヤーラド」יָלַד)、  
 「私は、【主】によってひとりの男子を得た(「カーナー」קָנָה)」と言った。

●創世記 4 章 1 節の「人はエバを知った」とあります。これは夫婦の性的結合を意味するヘブル的慣用句です。その例は、創世記 4 章 25 節の「アダムは、さらに、その妻を知った。彼女は男の子を産み、その子をセツと名づけて(「カーラー」 אָרָרָה)・・・」、および、I サムエル記 1 章 19~20 節の「エルカナは自分の妻を知った。・・・ハンナはみごもり、男の子を産んだ。その名をサムエルと呼んだ(「カーラー」 אָרָרָה)。」にも見ることができます。当然ながらイエシュアの場合、この「知った」という部分はありません。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。」(ルカ 1:35)ということで、生まれる者は、「聖なる者」「神の子」と呼ばれるのです。まさにイエシュアは聖霊による産出なのです。マタイ 1 章 25 節はこの男女の性的結合を意味するヘブル語の「ヤーダ」(יָדָה)を逐語的にギリシア語に翻訳したと言えます。このことも、マタイの福音書の原本がヘブル語で書かれていたことを証拠づけています。このような例が他にも多く見られることを、クロード・トレスモンタンは指摘しています。

●ちなみに、この「知ることがなかった」(新改訳)という部分をいろいろな聖書で読み比べてみると、以下のような訳になっています。NIV 訳「he had no union with her until」/NASV 訳「kept her a virgin until」/文語訳「相知る事なかりき」/塚本訳「一緒にならなかった」/岩隈訳「(肉体的に)相知ることをしなかった」/新共同訳「～と関係することはなかった」とあります。

●長い間、死語となっていたヘブル語が復興されたことは、神の大いなるご計画において重大なことでした。ただし、そのヘブル語が神の御子イエシュアを啓示する神の定められた唯一の聖なる言語であるという信仰が必要です。この視点をもたなければ、たとえヘブル語を話すユダヤ人であったとしても神の啓示を悟ることはできません。

●ヘレニズムは、今や全世界に浸透している人間中心の文化です。このヘレニズムと唯一対抗できるのが神中心のヘブライズムです。そこには思惟概念の相克(衝突)があります。使徒パウロはヘレニズムを「この世の知恵」と呼び、ヘブライズムを「神の知恵」と呼んでいます。パウロはこの両者には何のつながりも、まじわりも、調和も、かかわりも、一致もないことを強調し、「つり合わぬくびきをいっしょにつけてはならない」と述べています(II コリント 6:14~18)。これはやみと光との衝突であり、御国が完全に到来する日まで続きます。ヘレニズムとヘブライズムとの相克(衝突)は古くて新しい問題です。今日のキリスト教会において、従来の置換神学からヘブル的視点による聖書解釈に次第に目が開かれて来ている現象は、終わりの日に向けられたヘブライズムの復興と言えます。1948年にイスラエルが奇蹟的に建国したことに伴い、約二千年間にわたって死語とされてきたヘブル語が復興したことは、神のご計画においてふさわしい、必然的な出来事であったと信じます。

●前置きがかなり長くなってしまいました。2017年1月から礼拝説教で「マタイの福音書」から「イエシュアの公生涯」を取り上げて講解説教を始めました。特に、これまで私たちがそれほど考えずに、淡々と読み過ごしてきた箇所を、改めてヘブル語に戻して解釈し瞑想することによって、今まで見えていなかった驚くべき秘密が隠されていたことを知りました。以下、マタイの福音書 5 章 1~2 節にある「山上の説教」の舞台背景となる記述を、ヘブル的視点(ヘブル語)から解釈(注解)してみたいと思います。

## 1. マタイ 5 章 1～2 節のテキスト

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 5 章 1～2 節

- 1 この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに來た。
- 2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。

【語彙説明】

●「見て」と訳されたギリシア語は動詞の「ホラオー」(ὁράω)のアオリスト分詞(「エイドン」εἶδον)で、「見たとき」という意味。「登り」と訳されたギリシア語は「アナバイノー」(ἀναβαίνω)のアオリスト。つまり「登った」の意味で、一旦、そこで区切られます。ギリシア語の「見る」を現わす二つの語彙の違いについて、一般的に、「～の方に向く、～の方を眺める、たまたま目でものを見る、一見する」という意味では「ブレポー」(βλέπω)を使い、見た結果として、「知る、分かる、味わう」などの意味合いが入るときには「ホラオー」(ὁράω)を使うようです。マタイ 5 章 1 節の「見て」は後者です。

●「おすわりになる」も同様に「カスイゾー」(καθίζω)の分詞で「座ったとき」という意味になり、そこにイエシュアの弟子たちが「近寄って來た」(「プロセルコマイ」προσερχομαι のアオリスト)と続いています。1 節は二つの行為が区切られているというイメージです。つまり、「見て、イエシュアは山に登った」ということと、「イエシュアが座っていると、弟子たちが近寄って來た」という二つのことを少々区別して理解することは有益です。なぜなら、「山に登ること」と「座ること」とは別の事柄だからです。

●さて、この文章(5:1～2)の中にどんな驚くべきことが隠されているのでしょうか。ここには、これから語られる「山上の説教」の舞台となる背景が記されていることは明白です。それが記されていないまでも、イエシュアは「彼らに、教えて、言われた。」だけで話は通ります。ところがマタイは、上記のように記す必然性があったと思われます。「山上の説教」それ自体だけで「御国の福音」と深く関係することはもちろんのことですが、教えや奇蹟の部分だけでなく、イエシュアの行動や行為、順序、配置、登場する人の名前や地名といったことなども、すべて「御国の福音」と関係しているのです。つまり、どこを切ったとしても「御国」の概念なしには理解できない仕掛けになっているのです。その仕掛けを紐解く鍵がヘブル語に隠されているということです。

●その隠されている事柄が明らかになるためには、問いかけることが重要です。例えば、なにゆえにイエシュアはガリラヤのナザレで育ったのか。なにゆえにイエシュアはガリラヤから宣教を開始されたのか。なにゆえにイエシュアは漁師である者たちを召し出されたのか。なにゆえにイエシュアは山に登られたのか。・・・などなど、これらは問いかけなければ、そのまま通り過ぎてしまうような事柄です。しかし問いかけることによって、その必然性について深く考えることとなります。実は、そのことが重要なのです。

## 2. 山に登り、おすわりになったイエシュア

●イエシュアは「この群衆を見て、山に登り」とあります。「この群衆」とは、その前(4:25)に記されている「ガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から集まって来た大勢の群衆のことです。イエシュアは彼らのニーズに答えた後に山に登っています。なぜイエシュアは「山」に登られたのでしょうか。ここでは「山」がどこの山なのか一切説明されていませんが、おそらく、「山」はイエシュアが一人になって祈ることのできる格好の場所だったと言えます。一人になって祈れる場所は「山」だけでなく、「寂しい所」もその一つでした(マルコ 1:35)。また「朝早くまだ暗いうちに起きる」ということも、一人になれる最高の時でした。このように、イエシュアはしばしば山や寂しいところに退き、一人になって過ごすことを常としていました。それは働きによる疲れをいやすだけでなく、御父とともに過ごすためでした。

### (1) 「山」

●聖書における「山」は、神の啓示の場であることがしばしばです。アブラハムはモリヤの山で愛するひとり子のイサクをささげるように命じられます。そこでアブラハムは神のヴィジョンを見せられます(創世記 22:2,14)。モーセは神の山ホレブで主と出会い、神の民をエジプトから救い出すことを命じられます。また、エジプトを出た神の民のために神の律法を受け取る場所も同じくシナイ山でした。預言者エリヤは同じ場所で彼の後継者について語られています。イエシュアはヘルモン山で変貌し、本来の神の姿を現わします(マタイ 17:2)。また、弟子たちに対するイエシュアの大宣教命令はガリラヤの山でなされました(マタイ 28:16~20)。また、聖書において「山」はしばしばエルサレムを意味します(マタイ 5:14)。

●詩篇 24 篇 3 節で、ダビデは「だれが、【主】の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ちえようか。」とあります。そのダビデの問いかけの答えは、イエシュアを指し示しています。

### (2) 山に「登る」という行為

●イエシュアが山に登るという行為は預言的です。ヘブル語で「登る、上る」という動詞は「アラー」(עָלָה)ですが、この動詞は単に「登る」という意味の他に、「(いけにえを)ささげる」とか、「反芻する」という意味があります。「反芻する」動物はきよい動物であり、全焼のいけにえや罪のいけにえとして祭壇にささげられる牛や羊です。つまり、イエシュアが「山に登る」という行為には、やがて聖なる山エルサレムにおいて、神にささげられる神の小羊イエシュアご自身を預言的に象徴していると言えます。

### (3) 「座る」という行為

●群衆をご覧になったとき、イエシュアは「山」に登られました。そしてイエシュアが「おすわりになる

と」、弟子たちがみもとに来たと記されています。正確には「おすわりになったとき」(分詞アオリスト)、弟子たちが近づいて来たのです。「おすわりになる」とは、「着座された」という意味です。それをヘブル語にすると「ヤーシャヴ」(יָשָׁב)になります。「ヤーシャヴ」という動詞は、単に腰を下ろして「座る」という意味だけでなく、主の家に「とどまる、住む」という親しい交わりの概念があります(詩篇 23:6)。

●詩篇 15 篇 1 節で、ダビデは「主よ。だれがあなたの幕屋に宿るのでしょうか。だれが、あなたの聖なる山に住むのでしょうか。」と問いかけていますが、これは王なるメシアであるイエシュアによって実現します。腰をおろして座るという意味のギリシア語「カスイゾー」(καθίζω)という語彙からは見えてこない真理が、ヘブル語に戻すことで見えてきます。

●イエシュアが山に登って、おすわりになっているところに、弟子たちがみもとにやって来たという一連の動きと、その弟子たちに対して御国の憲章をイエシュアが口を開いて語り出したというつながりの中に、神のご計画における預言的な意味が隠されています。つまり、イエシュアが再臨され、王なるメシアとして、聖なる山エルサレムを中心とした御国(統治、王国=千年王国)を治められます。その御国における憲章が、3 節以降で、山上の説教として語られるのです。その憲章は、エレミヤが預言した新しい契約に基づくものであり、神の霊によって主の律法が心に書き記された者でなくては、とても守ることのできない憲章です。それはやがてイエシュアの再臨によってはじめて実現されるメシア王国の憲章です。「天の御国は近づいた」とあるように、それはすでにイエシュアの来臨によってはじまっているのです。

### 3. 「弟子」という語彙の概念

●イエシュアが山に登り、おすわりになったあと、そこに弟子たちがみもとに来たとあります。ここで初めて「弟子」(「マセーテース」μαθητής)という語彙が登場します。「マセーテース」(μαθητής)は、本来「学ぶ者」という意味で、「教師」(先生、師)に対応する語彙です。ただし、70人訳(LXX)聖書では使われていません。ということは、「弟子」という語彙は新約聖書で使われる新しい概念を持った語彙だということです。ヘブル語では「タルミード」(תַּלְמִיד)がそれに相当します。この「タルミード」の語源は動詞「ラーマド」(לָמַד)で、「教える、学ぶ」という両方の意味が含まれています。「弟子」という語彙は旧約聖書では1回しか使われていません(I 歴代誌25:8)。

タルミード	イム	メーヴィーン	カッガードール
עַם-תַּלְמִיד		מִבֵּין	כְּגֹדֹל
弟子	～も～と共に	悟りを与えられた者(分詞)	大いなる(形) 同様に

【新改訳改訂3】 達人も弟子も、みな同じように(任務のためのくじを引いた。)

【口語訳】 教師も生徒も皆ひとしくその務のためにくじを引いた。

【新共同訳】 熟練した者も初心者も区別なく、くじによって務めの順番を決めた。

●イエシュアは「弟子は師以上には出られません。しかし十分訓練を受けた者はみな、自分の師ぐらいにはなるのです。」(ルカ 6:40)と言われましたが、ここでイエシュアが言わんとしていることは「教師と生徒」には雲泥の差があるということです。特に御国の奥義(秘密)に関しては、弟子たちはラビ(師)以上には出られないのです。ですから、**弟子たちは師から学び続ける必要があります、御国の奥義を「求め、探し、たたき」続**

愛の関係	御父—御子
	神—神の子
働きの関係	神—メシア
	神—使徒
	主—しもべ
	師—弟子

**けなければならぬのです**(マタイ6:33, 7:7~8)。そのためにガリラヤのラビであるイエシュアは、宣教開始と同時に弟子たちを召されています。それは彼らに「御国の奥義」を教え、悟らせるためなのです。

●ちなみに、「弟子」を意味するギリシア語の「マセーテース」は261回。四福音書(マタイ72回、マルコ46回、ルカ37、ヨハネ78回)と使徒の働き(使徒では28回)のみに使われています。パウロの書簡では使われておらず、「しもべ」を意味する「ドゥーロス」(δοῦλος)、それをヘブル語にすると「エヴェド」(עֶבֶד)、  
「仕える者」を意味する「ディアコノス」(διάκονος)、ヘブル語にすると「メシャラット」(מְשָׁרָט)という語彙が使われます。なぜパウロは「弟子」という語彙を使わなかったのでしょうか。それは彼自身が主の弟子の一人であったからではないでしょうか。事実、パウロ以外にイエシュアの弟子としての本分を有した者はだれ一人としていませんでした。事実、彼は主の弟子として実に多くの奥義を示された人でした。

●さて、イエシュアが山に登り、おすわりになったあと、そこに弟子たちがみもとにやって来たとあります。新約聖書で「弟子」(「マセーテース」μαθητής)という言葉は、マタイの福音書5章1節ではじめて登場します。そしてマタイの最後の章でも、「**あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。**」(28章19節)とあります。**「弟子」の本分は「神の秘密を教えること」**です。ですから、イエシュアは「だから、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。」(マタイ13:52)とされています。ここでイエシュアは「天の御国のために弟子とされた者」のことを「学者」と呼んでいます。「弟子」=「学者」(「グランマテュース」γραμματεὺς)なのです。「学者」のヘブル語は、「ソーフェール」(סוֹפֵר)です。どんな学者かと言えば、自分の「倉」、すなわち自分の「宝物倉、宝庫」から宝を自由に取り出すことのできる主人のような「学者」だというわけです。この意味において、「弟子となること」と「弟子として訓練すること」は、いつの時代においても重要なテーマなのです。

●次世代のために、こうした弟子が育まれることに心を尽くさなければなりません。「あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子とせよ。」という命令は、ひとりでも多くの人をクリスチャンにするということではないかも知れません。むしろ御国のための弟子、御国の宝をいつでも、どこでも、どこからでも、引き出して語ることでできる学者が求められているのです。なぜなら、**弟子たちには「天の御国の奥義を知る(「ギノースコー」γινώσκω)ことが許されている**」からなのです(マタイ13:11)。

#### 4. 「口を開いて、語る」とは

●2 節に、「そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。」とあります。一見、当たり前のように思える表現ですが、ヘブル的視点から見ると、当たり前でなくなるのです。イエシュアが口を開く前の状態(公生涯に入る前まで)は、主のみおしえである「トーラー」が常に瞑想されており、イエシュアの心には神のみおしえが絶えず反芻されていることを考えなければなりません。その延長線上において、口を開くことで、主のみおしえがあふれ流れるようにして出て来たことをイメージしてみてください。

●3 節から始まる「幸いなことよ」を意味するギリシア語の「マカリオイ」(Μακάριοι)は、詩篇の「アシュレー」(אַשְׁרֵי)に相当します。詩篇 1 篇の冒頭は「アシュレー・ハーイーシュ」(אַשְׁרֵי הָאִישׁ)です。その人は主のおしえを喜びとし、昼も夜もそのおしえを口ずさんでいます。この「口ずさむ」と訳された「ハーガー」(הִגָּה)は瞑想用語の一つであり、常にその人のうちで主のおしえが反芻されているのです。この「ハーガー」(הִגָּה)が詩篇 2 篇にも登場します。それは神に逆らう者たちに対して使われており、彼らの口から出て来るのは「つぶやき」です。それは彼らの心の中にある思いが言葉となって出てきたものです。私たちの口から出てくる言葉も、往々にして心の中にあるものが出て来るということを考えるならば理解できると思います。

●詩篇 1 篇の「幸いなのは、その人」(「アシュレー・ハーイーシュ」אַשְׁרֵי הָאִישׁ)は、神の御子イエシュアのことを預言的に語っています(ヨハネ 5:39)。この方こそ天の御国の福音を私たちに教えてくれる方です。イエシュアは 30 歳にして公生涯を始められますが、それまでの長い期間、心の中に反芻していた御国の秘密を伝えるために、今や初めて口を開かれたのだと考えるならば、何とエキサイティングなことでしょうか。イエシュアの心の中で、長い間、反芻されてきたものが、今や口からあふれ出て来るのです。それはつぶやきではなく、いのちをもたらす神のみおしえであり、天からの神のパンです。これがまさに「御国の福音」なのです。私たちはその教えに対して、耳を開いて理解する必要があるのです。なぜなら、以下のように語られているからです。

【新改訳改訂第3版】詩篇 78 篇 1~4 節

- 1 私の民よ。私の教えを耳に入れ、私の口のことばに耳を傾けよ。
- 2 私は、口を開いて、たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう。
- 3 それは、私たちが聞いて、知っていること、私たちの先祖が語ってくれたこと。
- 4 それを私たちは彼らの子孫に隠さず、後の時代に語り告げよう。

【主】への賛美と御力と、主の行われた奇しいわざとを。

●上記の詩篇 78 篇 1~2 節は、神の御子イエシュアを通して完結しています。イエシュアの語った「たとえ」は、私たちが人に良く理解できるように用いる例話とは異なります。それは「天の御国」における秘密であり、奥義です。ですから、イエシュアのたとえにある「なぞ」に関心を示し、その意味について尋ね求めることが許されている者こそイエシュアの弟子たる所以でした。それゆえ、イエシュアの弟子とな



## Hebrew Midrash No.11

る者たちは、「問いかけ」なければなりません。もし御子イエシュアの語られた「たとえ」話の真意を尋ね求めなければ、なぞが解かれることはないからです。「たとえ」のみならず、聖書に記されているあらゆる事柄に隠されている秘密を解くために、尋ね求めることが弟子たちには許されているのです。

●「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見出します。たたきなさい。そうすれば開かれます。」とイエシュアは言われました。このような者に、御父は聖霊という方を賜物として与えて下さると約束されています、この賜物なる聖霊の助けによって、はじめて私たちは「昔からのなぞ」を悟ることができるからです。

### ベアハリート

●クロード・トレスモンタンの命題—「すべての福音書はヘブル語によって書かれた」とする命題—を論証するためには、継続的な熱意が求められますが、この世においてとてもやりがいのある仕事ではないかと思えます。御国の福音の奥義を知り、それを教えることが許されている弟子の存在こそ、今日の教会に求められている事ではないかと信じます。このことは、「教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであって、私たちのイエス・キリストにおいて実現された神の永遠のご計画に沿ったことです。」(エペソ 3:10～11)。ですから、そのために祈り続けなければなりません。そうすれば、その目的を果たすためのすべての必要は備えられると信じます。

2017.2.7

Hebrew Midrash No.11